



株式会社バイオマスレジンホールディングス 取締役副社長

# 中谷内 美昭 さん

大堀相馬焼 松永窯 賞

東北大学 地域イノベーション研究センター 賞

LEAP OVER 賞

株式会社 T 賞

ケアテック 賞



## 農業と環境のリ・デザイン お米のプラスチックで 脱炭素社会へ貢献。 浪江から世界へ！

株式会社バイオマスレジンホールディングスは、環境問題対策としてプラスチック市場が大きく変わろうとしている中、日本人の国民食であるお米を活用した国産バイオマスプラスチック「ライスレジン®」の開発に取り組んでいます。食用に適さないお米を活かすフードロス対策と、バイオマスの導入により、

CO2 排出削減に貢献できるというライスレジン。米どころであり、「福島県 2050 年カーボンニュートラル」を宣言している福島県で、福島モデルである「お米とライスレジンの生産」を国内、海外に向けて発信し、福島県の脱炭素社会の実現を目指します。

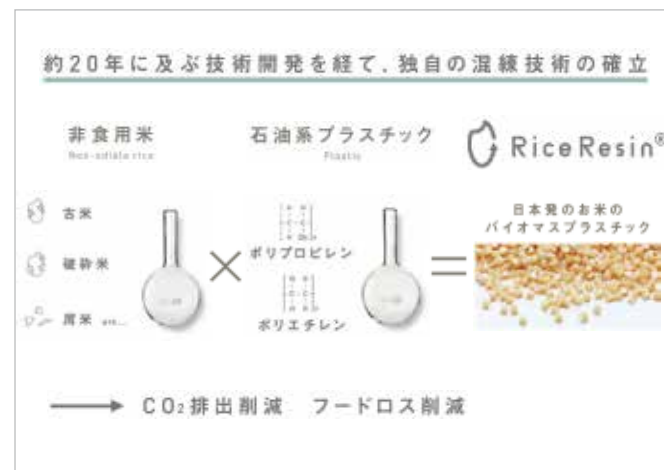
## ライスレジンで農業の課題を解決

バイオマスレジンホールディングスで取締役副社長を務める中谷内美昭さんは、インターネットプロバイダー So-net の立上げに携わり、環境コンテンツを推進する中で、京都大学の教授との出会いがあり、バイオマスプラスチック製造装置の開発に参加。お米のプラスチック樹脂開発に 20 年間取り組んできました。

米どころである福島県をはじめ、全国のお米の生産地では、屑米や碎米、さらには台風被害に遭った災害米やカビに襲われた事故米など、食用に適さないお米の処理は大きな課題です。さらに、米需要の低下や、毎年発生する災害、高齢化や耕作放棄地問題等により、米づくり自体が疲弊していく現状に対しても、ライスレジンは有効な解決の道を示すことができます。IT ビジネスの経験も豊富な中谷内さんは、米づくりを刷新すべく農機ロボットや IoT 等も活用し、ライスレジン用のお米の生産にも挑戦。休耕田・耕作放棄地を再生させ、地域の活性化への寄与にも意識を向けます。

また、福島県では東日本大震災による原発事故の被害も忘れることはできません。浜通りの原風景の復活を合言葉に生産農家さんとの共存繁栄の道を探りはじめ、2020 年 9 月には、浪江町に株式会社スマートアグリ・リレーションズを設立。さらに翌年 7 月には、米づく

りからライスレジンの生産まで一貫して取り組む「バイオマスレジン福島」を、同じく浪江町に地元企業とともに設立。ライスレジンの原料となる資源米を、効率性・生産性を重視した大型工場モデルとして生産すべく、本格稼働を目指します。



住所 東京都千代田区丸の内 1-5-1  
新丸の内ビルディング  
e-mail info@biomass-resin.com  
U R L https://www.biomass-resin.com

創業 2020 年 3 月 10 日  
事業内容 バイオマス資源を利用したプラスチック樹脂原料の製造・販売及び研究開発

## 古来より活かされるお米の特性で時代の先端へ



バイオマスプラスチックの分野では、海外でもトウモロコシやサトウキビなどの活用が進んでいます。中谷内さんが目を付けたのは、海外に依存せず、国内で安定的、定量的に確保できる穀物であるお米でした。お米は、餅のように温めると柔らかく、冷めると固くなる性質があり、これはプラスチックと同じ特性です。先人達はお米を「のり」として活用し、古来より建具や家具の接着剤としても使われていました。この特性から、お米をプラスチックとして活用する手法を開発しました。

我が国は、使い捨てプラスチックの使用量においても世界 2 位を占め、バイオマスの活用は温室効果ガス削減に向けて喫緊の課題です。しかし、先に挙げたトウモロコシ、サトウキビは、生産国である諸外国にとっては国家戦略作物であり、世界規模での需要の高まりも相まって、日本国内に入る量はわずか。中谷内さんは、お米を工業製品の資源に変えることで、バイオマスプラスチックの地産地消モデルを描き、国産生分解性プラスチックの実現に意欲を燃やし続けます。



ライスレジン樹脂と成型品事例▲



2021 年春、浪江での田植え▲